

人間腸詰

夢の久作（夢野久作）

青空文庫

あつしの洋行の土産みやげ話ばなしですか。

イヤハヤどうも……あんまり古い事なんで忘れちゃいましたよ。何なら御勘弁願いたいもんで……ただもうビックリして面喰めんくらつて、生命いのちからがら逃げて帰けえつて来たダケのお話でゲスから……。

……へエ……あの話。あの話と申しますと？　へエ。世界が丸いお蔭で、あつしが腸ソーセージ詰じになり損なつた話……。

うわあ。こいつあ驚いた。誰からお聞きになつたんで。へエ。あの植木屋の六から……弱つたなあドウも。飛んでもねえ秘密をバラしやがつて……アイツのお饒しゃべり舌しと来た日にや手が附けらんねえ。死んだ親父おやじから聞きやがつたんだナ畜生……誰にも話した

こたあねえのに……。

へエへエ。これあドウモ御馳走様でゲス。こうやって自分の手
にかけたお座敷で、兄弟分きょうでえぶんがこしれえたお庭を眺めながら、
旦那様のお相しょうばん伴ばんをして一杯頂戴出来るなんて職人冥利みょうりの
行止まりでげしよう。ヤツ、これあドウモ奥様のお酌しやくで……どう
ぞお構い遊ばしませんで……手酌で頂戴いたしやす。チイツト世
界が丸過ぎるよう。へへへ。オツトツト……こぼれますこぼれ
ます。

それじゃそのガリガリの一件から世界のマン丸いわけが、わか
つたてえお話を冒頭まくらからやって見やすかね……ガリガリてなあ人
間を豚や犬とゴツチャにして腸詰ちようづつめにする器械の音なんで……へ

エ。亜メリカアメリカに今でも在る。旦那様も御存じ……へエへエ……そのガリガリの中へあつしが這入り損ねたお話はいそこなんでゲスからアンマリ気持のいいお話じや御座んせん。亜メリ加アチラでは人を殺すとアトがわからねえように腸詰めにしちまうんだそうですね。今思い出してもゾツとしますよ。お酒のお肴さかなになるようなお話じやねえんで……何なら御免を蒙りてえんで……。

へエツ。奥様はソナお話が大のお好きと仰言おっしゃる……恐れ入りやしたなあドウモ。そんな話を聞いてる中に眼尻が釣上つて来て自然と別嬪べっぴんになる……新あつて手の美容術……ウワア。エライ事になりましたなあドウモ。あつしの嬢かかあなんぞはモウ以前せんに水天宮で轆轤首ろくろつくびの見世物を見て帰けえつて来ると、その晩、夜通し魘うなされや

がったもんで……ほかじやあ御座んせん。手前てめえの首が抜けそうで心配になつちやつたんだそうです。……ヒヤア、抜ける抜けるとか何とか詰つまらねえ声を真夜中出しやがるんで……篋べらぼう棒めえ、抜ける程の別嬪と思つてやがるのか……つてんで、背中を一つドヤシ付けてやりましたらヤツト正氣付きましたかね。あれがドウモいけなかつたようで……とうとう一生涯、別嬪にならず仕舞じまいで、惜しい事をしましたよ。まったく。へへへ。世の中は変れば変るもんでげす。

あつしが二十七の年でゲスから三十年ばかり前のことでしょう……明治三十何年かのお正月の話でゲス。その時分は台湾の総督府で仕事さして頂いておりましたが、その春から夏へかけて亜米アメ

リカセントルイスの聖路易セントルイスてえ処で世界一の博覧会がオツ初はじまるてんで、日
 本の台湾からも烏龍茶ウーロンちゃの店を出して宣伝してはドウかてえお話
 が持上りました。その時分までは何でもカンでも船はくれえ来船はくれえ来つ
 てんで紅茶でも何でもメード・イン・毛唐けとうでねえと幅が利かねえ
 のが癩しやくだつてんで……。印度産インドの極上品よりもズツト芳香かおりの高い、
 味の美いい烏龍茶を一つ毛唐に宣伝してみろつてえ、その時の民政
 長官の男爵様で、後藤新平ごとうしんぺいてえ方が……。へエ。その蛮ばん爵しやく様
 が号令をおかけになつたんだそうで……。あつしも一つ台湾風の大
 きなカフェエを、この博覧会の中へ建てに行かねえかつてえ蛮爵
 様からのお言葉でしたがね、ビックリしやしたよマツタク。

自慢じゃ御座んせんが小学校を出たばかりのタタキ大工なんで

……雀がチューチューからす鴉がカアカア。チイチイパアパアが幼稚園の先生ぐれえの事しか知らねえ江戸ツ子一流の世間見ずでゲス。箱根の向うへ行つたら日本語でせえ通じなくなるんですから、洋行なんて事あ考えてみた事も御座んせん。

総督府の官舎を建てに台湾へ渡る時にも、乗っている船が陸地おかの見えない海の上を平気でドンドン走つて行きますので、何だか妙な気持になつちやいましてね。あつし 私たちを引率している藤村てえ工学士の方に聞いたら笑われましたよ。

「地球は丸いものだから心配しなくてもいいよ。イクラ行つたつて、おしまいにはキツト日本へ帰り着くんだから」

「へエ、誰か見た者がおりますかえ」

「見なくたってわかつている。日本男児の癖に意気地が無えんだ
ナお前は……。天草の女を御覧……。世界が丸いか四角いか、わか
りもしない娘ツ子の中から世界中を股にかけて色んな人種を手玉
に取って、お金を捲上げちやあ日本の両親の処へ送るんだ。大し
たもんだよソレア。世界中のどこの隅々に行っても天草女の居な
い処は無いんだよ」

「へエツ……。成る程ねえ。そんなもんですかねえ」

「まったくだよ。洋行するとわかる」

「へエ、そんなに天草女つてものは大勢居るんもんですかねえ」

「居るか居ないか知らないが、外国では炭坑でも、金山でも護

謨林でも開けると器械より先に、まず日本の天草女が行くんだ。

それからその尻を嗅ぎ嗅ぎ毛唐の野郎がくっついて行って仕事を初める。町が出来る。鉄道がかかるという順序だ。善い事でも悪い事でも何でも、皮切りをやるのはドツチミチ日本の女だつてえから豪気なもんだよ。まったく思いがけない処でヒヨイヒヨイ天草女にぶつかるんだからね」

「へエ。そんな女は、おしまいにドウなるんでしょうか」

「それアキマリ切っている。その中に世界の丸いことがホントウにわかつて来ると、そこで一人前の女になって日本へ帰つて来て、チヤンと普あたりまえ通の結婚をするんだ。又……それ位の女でないとな草では嬢かかあに招よび手が無い事になつてゐるんだから仕方がない」

「嫁入道具に地球儀を持つてくようなもんですね」

「まあソナもんだ。だから天草には、世界の丸いことがわからないと洋行出来ないナンテ意気地の無い女は一匹も居ないんだよ」

あつしは余計な恥を搔いたんで赤くなつちやいましたよ。それでもイクラか安心するにはしましたかね。

ですから^{アメリカ}亜米利加へ渡る時には相当、落付いておりましたよ。

仲間の奴に……大工と左官とで、植木屋の六の親子も入れて十四

五人ぐれえ居りましたつけが……そんな連中に^{キールン}基隆で買った七

十銭の地球儀を見せびらかして、日本の小さい処を講釈して聞かせたりして片付いておりましたがね。その中^{うち}に毎日毎日アンマリ

長いこと海の上ばかりを走って行くのに気が付くと妙なもので、理窟は呑込んでいる癖に、何となく心配になつて来ました。今で

も初めて洋行する人は、よくソナのような頭のヘンテコになる病
気にかかるんだそうで、熱ぐらいあつたかも知れません。別に何
ともないのに、何だかミンナが欺されて島流しにされるんじやね
えか。佐渡が島へ金坑掘りに遣られるんじやねえか……なんて考
えているとドウモ頂くものが美味しく御座んせん。毎日毎日その
ライスカレーとシチウとコロツケに飽きちやつたのかも知れませ
んがね。

その中うちに船の中で演芸会が初まりました。あつしがステテコを
踊ることになつたんで……船の中に派手な三桝みます模様の浴衣ゆかたと……
その頃まだ団十郎くだいめが生きておりました時分で……それから赤い禪ぜん
んんどしどしもめん
木綿もめんと、スリ鉦がね、太鼓、三味線さみせんなんぞがチャント揃つてたの

には驚きましたよ。

当日になると中甲板の五六百人ぐらい這入る広間に舞台が出来て、そこへ一等の船客から吾々特別三等の連中まで一パイになつて見物するんで、皮切りにヒョウキンな西洋人の船長が飛出して西洋手品を初める。ナカナカ鮮かなもんでしたが、これあ当前でさあ。そのあとへ日本人が上つてヤツパリ西洋手品を使いました。がアンマリ冴えません。メード・イン・ジャパンが今でも幅の利かないのは手品ばかりでしょう。その中であつしのステテコの番が来たんで立上ろうとしているところへ今の植木屋の六の親父でゲス。その時はモウいい禿頭の赤ツ鼻でしたつけが、あつしから世界の丸い話を聞てからというもの毎日毎日甲板に出て、

船の周囲まわりをグルグルまわってゆく蓄音器のレコードみたいに平べつたい海を見まわしながら首をひねっていた奴なんで……その日も、あつしと組になってステテコを踊ることになっていたんです
が、そいつが派手な浴衣に赤禪あかぜんのまんまボンヤリ甲板から降りて来やして、出での囃子はやしを聞いているあつしの顔をジイツと穴のあくほど見ながら、小ツポケなドングリ眼まなこをパチパチさせたもんです。

「おれあドウしてもわからねえ」

「何がわからねえ」

「世界が丸いてえ理窟りくつが……」

「馬鹿ばかだな手前てまえは……イクラ云って聞かせたってわからねえ。台

湾へ渡った時にヤツトわかつたつて安心してたじゃねえか」

「それはお前めえだけだ。俺おらあアレからチツトモ安心していねえんだ。不思議でしょうがねえんだ」

「何が不思議だえ」

「だつて考かんげえても見ねえ。あの地球儀みてえなマン丸いものの上にドウしてコンナに水が溜ためまつているんだえ……。おまけに大きな浪が打つてるじゃねえか……。ええ……。ええ……」

そう聞くとあつしも頭の芯しんがジインとして考かんげえ込こんじまいました。口では強いことを云いながら心の奥ではやつぱり心配していません。ところが病気のセイだったかも知れませんが、凶星を指されてハツとしたようなアンバイで変テコレンな眼のまわるよ

うな気もちになっちゃいました。そこいらがだんだん薄暗くなつて気が遠くなつて行くようなアンバイで……そのまんま引っくり返けえつちやつたらしいんです。気が弱かつたんですね、あつしは……もつともその時にはモウ六の親父おやしと一緒に揃つてソナ病氣にかかつていたんだそうですから仕方がありませんがね。妙な病氣があればあつたもんでゲス。癩てんかん癩さしづなら差詰め地球癩癩さしづだったのでしょうが、そんなオボエは毛頭なかつたんで……自分でも、おかしいと思ひましたよ。

ですから同じ病氣にかかつていた六の親父おやしも、あつしが引っくり返けえつたのを見ると直ぐに追っかけて引っくり返けえりやがったんだ
そうで……これは大変だと思つたトタンに世界中が平ベタクなつ

たてんですからダラシのねえ野郎で……お蔭でステテコはオジャ
ンになつちまいました。誰が云い出しものか知れませんが、モト
モト平べつたい処に住んでいる人間に「世界は丸い」なんて罪な
おふれ御布告を出したものですよ。まったく、おおもときよう大本教のお筆ふでさき先に
引つかかつたみてえで……それから亜米利加へ着くまで二週間ば
かりの間、六の親父とあつしと二人で上甲板の病室に入れられて
ウンウン云つておりました。

アトから聞いてみると揃いも揃つたステテコが二人つながつて
引つくり返つた。けえ場違いのステテコだ……てんで船中の大評判に
なつたんだそうで……おまけに二人とも……大変だ大変だ……と
か何とか変な諺うわごと語を並べたもんですから、念のために血を取つ

て調べてみると恐ろしいもんでゲス。浮気の痕跡あとがタツプリと血の中に残っている。この白痴野郎こけツ……てな毒の名前なまえだつたと思
いますかね。へエ。そのゴノゴツケンの陽性なんで、テツキリ脳
梅毒……何をするかわからねえということになって閉め込みしを喰
つたもんです。その又、船のお医者つて奴がチャチな塩しよっぱい野
郎だつたのでしよう。その中うちにホントの病氣の名前なまえがわかつたん
だそうですが……。

へエ。その病氣の名前でゲスカ。エエト……そうそう六の親父おやじ
のが「野垂れ死のたに」てえんで、あつしのが「鸚鵡おうむ・小便シッコ」てんだ
そうで……笑いごとじゃねえんで……へエ。ノスタレジイ……ノ
スタルジヤにホーム・シックでゲスカい。どうもおかしいと思つ

た。お笑いになつちや困ります。二人とも熱が八度ばかり出ましたよ。日本へ帰ってから聞いてみたら舶来の神経衰弱なんだそう
で……重いのがノスタレジイで軽いのがオーム・シツコてんださ
うですが、ハイカラな病気があればあるもんですな。派手な浴衣
の赤禪あかふんどしに、黄色い手拭の向う鉢巻がノスタレのオーム・シツコで
ウンウン云つてるんですから世話ありやせんや……。

それでも亜米利加へ上陸あがすると二人とも急に元気になりましたね。
セントルイスセントルイス 聖路易へ着くと直ぐに建前たてまえにかかりやした。藤村てえ工学士
さんが引いてくれた図面の通りに台湾式の御殿を建てましたが大
した評判でげしたよ。ソレアあつしとノスタレ爺じいの写真相が大きく
新聞に出ましたよ。ノスタレ爺の方は植木屋でゲスからその台湾

館の前に作った日本式のお庭が大受けに受けちやったんで……ノスタレ爺の野郎は雪舟の子孫だつてえ事になつたんですから呆れて物が云えませんや。あつしの方はモットおかしいんで……あつしはこれでも小手斧こちようなの癩持ちでげして、小手斧こちようなの木片こっばが散らかるのが大嫌いでげす。そこで最初ノツケから手を附けた四十尺ばかりの美事な米べいまつ松むなぎの棟木をコツンコツンと削こなして行く中うちに四十尺ブツ通しの継つながった削屑アラをブツ放しちやったんで、見ていた毛唐の技師きしが肝きもを潰したもんだそうです。その話が亜米利加中の新聞に出たつてんで、あつしが船の中で退屈しの凌しぎのに作った箱根細工の力ラクリ箱が、まだ博覧会の初まらねえ中うちにスツカリ売約済みになる。六の親父おやしをお雪の旦那のパイパイモルガンて奴が買いに来る

つてなアンバイで大した景気でしたよ。毛唐つて奴はつまらねえ事を感じするんですね。へへへ。

その中に屋根の反そツクリ返けえった、破は風造ふうづくりのお化けみてえな台湾館が赤や青で塗り上つて、聖路易セントルイスの博覧会がオツ初ぼじまる事になりますと、今のノスタレとオーム・シツコが二人でフロツキコトてえ活弁かつべんのお仕着せみてえなものを着込んで入口の処へ突立つて、藤村さんから教おそわつた通りの英語を、毎日毎日大きな声で怒鳴るんです。

「じゃぱん、がばめん、ふおるもさ、ううろんち、わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」

お笑いになつちや困ります。何てえ意味だかチツトモ知らなか

つたんで……最初の中うちは茶目好きの藤村さんが「右や左のお旦那様」を英語で教えたんじゃないかねえかと思つてましたが、そうでもないらしいです。お大師様の「あぼきやあ兵衛べえ。露西亞ロシアのう、中村だあ」式の英語で、毛唐の厄払いか、荒神祀りまつの文句じゃねえかとも考かんげえてみましたが、そうでもないらしいんで……ズツト後あとになつて聞いてみましたら「日じやぱん本専売局がぼめん台ふおるもさ湾うろろん烏龍茶一杯あふてんせんす十銭、イラハイ《かむいん》イラハイ《かむいん》」てんですから禁まじな厭いやいにも薬にもなれあしません。

もつともこのお祓はらいの文句の意味が、そんなに早くからわかつてたら、あつしの生命いのちは無かつたかも知れません。舶来ソラーの腸詰ジになつちやつて、毛唐の糞くそ小便しょうべんに生れかわつていたかも

知れねえんで……変テコなお話でゲスが人間の運てえものは、ド
ンナ事から廻り合わせて来るか知れたもんじや御座んせん。正直
のところ「わんかぶ、てんせんす」と米の生なる木があつしの生命いのち
の親なんで……。

とにかくソイツを訳のわからねえまんまに台湾館の前に突立っ
て、滅めつ法ぽう矢や鱈たらに威勢よく怒鳴つていとドシドシ毛唐が這入っ
て来る。台湾館の中では選よりぬ抜とびきき飛切りの台湾生れの別べつ嬪びんが、英
語ペラペラで烏龍茶の講釈をしながら一枚セント八仙ぼしょうの芭蕉煎餅せんべいを
出してお給仕をする。その毛唐らが這入りがけや出て行きがけに
あつしとノスタレに五セント仙セントか十セント仙セントずつ呉れて行きます。たまには一
弗ドルも五ドル弗ドルも呉れる奴が居る。そうかと思うと何も呉れねえでソツ

ポ向いて行く猶^{ジュー}太人みてえな奴も居るつてな訳で、いいお小遣いになりやしたよ。

その中^{うち}に英語がチツトずつわかつて参りやした。水の事を「ワラ」ってんで……ワラワセやがるてのは、これから初まったのかも知れません。舟に乗つて来るのがナベゲタ。席^{よせばなし}亭話の鍋草^{なべぞう}履^りてえのと間違ひそうですね。女の事が「レデー」ですから男の事が「デレー」かと思つたら豈^{あにはか}計らんや「ゼニトルマン」でげす。成る程これあ理窟でゲスが失礼したくなりますね。奥さんのことが「ママ」……「女はマモノ」つてえ洒落^{しゃれ}かも知れませんがドウカと思いますよ。「お早よう」てのが「グルモン」、こいつは「グル」だけでも間に合います。江戸ツ子の「コンチワ」が

「チャア」で済むようなもんでげしよう。今晚はが「グルナイ」。「勝手にしやアガレ」てクツ付けてやりてえくれえで……「左様なら」が「グルバイ」……どうしてこう毛唐はグルグル云いたがるんだか……けだもの獣から人間になり立てみてえで……もつとも毛唐は毛の字が付くだけに手も足も毛ムクジヤラですからね。女なんかでも顔はパヤパヤとした生うぶ毛げだらけで身体中からだは鳥の毛を撈むしったようにブツブツだらけでゲス。傍へ寄ると動物園臭くって遣り切れませんがね。男でも女でも物を呉れるたんびに「タヌキ」と云つてやると喜んでいゝんですからヤツパリけだもの獣ひどなんでげしよう。

ところが、その毛唐のタヌキ野郎に非道ひどい目に合あわされたお話なんで……けだもの獣けだものだけに悪智恵あなにかけちや日本人は敵あないませんや。

あつし等が人寄せをやっている台湾館の中には六人の台湾娘が居て、お茶の給仕をしておりました。そいつ等の名前は三十年も前の事ですから忘れちやいましたが、何でもフン、ペア、チヨキ、ピン、キリ、ゲタつてな八百屋の符牒みたいな苗字の女の子が、揃つて台湾選り抜きよの別嬪ばかりなんで、年はみんな十七か八ぐれえの水の出花でばなつてえ奴でしたが、最初すけつからの固いお布告ふれで、そんな女たちに指一本でも指したら最後の助、お給金が貰えねえばかりでなく、亜米利加でタタキ放しにするというばんしゃく 蛮 爵様やく からの御達しなんで、おまけに藤村さんは藤村さんで、一足でも博覧会場から踏み出すことはならねえ。亜米利加の町にはギヤングとかガメンとかいう奴がどこにでも居て昼日中でも強盗や人浚ひとさら

いをやらかす。気の弱い奴と見たらピストルで脅威おどかして大盗おおどろ賊ぼうや密輸入の手先にしちまうから気を附ける。一度ソナ奴に狙われたら生きて日本に帰けえれねえからそう思えつてサンザ威嚇おどかされておりましたからね。何の事あねえ不動様の金縛りを喰くつた山やまいぬ狼やまいぬみてえな恰好で、みんな指くわを啣くわえて、唾液つばきを呑み呑みソナ女たちを眺めているばかりでした。

可哀相に女の出来ねえ職人たら歌を忘れたカナリアみてえなもので……へエ。あつしや今でも気が若い方なんで、その頃はまだ三十になるやならずの元気一杯の奴が、青い瞳めをしたセルロイドじやあるめえし、言葉も通じなけあ西も東もわからねえ人間の山奥みてえな亜米利加三界へ連れて来られて、毎日毎日そんな別嬪

たちの色目づかいを見せ付けられながら涙声を張り上げて、

「わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」

をやらされているんですから、たまりませんや。ノスタレ爺もオームのオシツコも眼が釣上つちやつて、今にもポンポンパリパリと破裂しちまいそうな南^{ナンキン}京花火みてえな気もちになつちまいますね。哀れとも愚かとも何とも早や、申上げようのない「ふおるもさ、ううろんち」が一對^{ついで}、出来上つたもんでゲス。

ところがここに一つうまい事が持上りました。その女たちの中でも一等捌^{さば}けるピン嬢^{ちゃん}とチヨキ嬢^{ちゃん}という二人がノスタレだかオシツコだかわかりませんが病氣になつちやつたんで、とりあえずの埋め合わせに聖^{セントル}路易^{イス}の支那料理屋に居たというチイチイって

うのとフイフイっていうのと二人の別嬪が手助けに来たんでげす。何しろ一人で卓テーブル子を六つ宛ずつも持っているんで一人欠けても頬ほおげ返えしが附かないですからね。占めた。こいつは有難いことになつたもんだと私あつしは内心でゾクゾク喜んじやいました。ねえ。そうでしょう。今まで居た女には指一本さしても不可いけなかつたかも知れねえが、今度来た女なら差さしつけ支えなからう。しかも向うが二人前ならこつちも二人前と云いてえが、片つ方が禿はげ頭あたまの赤ツ鼻のノスタレじや問題にならねえ。若さといい、男前といい、一番鬪くじの本鬪ほんくじはドツチミチこつちのもんだがハテ。ドツチから先に箸はしを取ろうかテンデ、知らん顔をして「わんかぶ、てんせんす」のおまじないを唱えながら二三日ジツと様子を見ていとドウで

す。このチイ嬢ちやんとファイ嬢ちやんの二人が一緒に、あつしの方へ色目を使い初めたじや御座んせんか。

へへ……どうも恐れ入りやす。おととつと……こぼれます、こぼれます。どうもコンナに御馳走になつたり、勝手なお惚のろけ気を聞かしたりしちや申もうしわけ、御座んせんが、ここんところが一番恐ろしい話の本筋なんで致いたしかた方が御座んせん。どつちみち混線させないようにお話しとかないと、あとで筋道がわからなくなりやすからね。へへ、恐れ入りやす。

二人の中うちでもファイファイっていうのは、まだ十七か八の初ういうい々しい聡明りこうそうな瞳めをした、スンナリとした小娘でしたが、あつしに色目を使いはじめたのはドウヤラ此こいつ娘の方が先だつたらしいんで

す。台湾館に来る匆々そうそうから何やら物どうを言いたそうな眼付きをして、あつしの方を見ておつたように思います。そいつを一方のチイチイって娘やっが感付いて横槍を入れたものらしいんです。へエへエ。その通りその通り。あつしの取り合いっこが始つた訳なんで、へへへ。へエへエ。大した色男になつちやつたんで……油をかけちやいけません。ああ暑い暑い……イエイエ。モウ頂けやせん。ロレツが廻らなくなつちや困るんで……アトにモノスゴイ話がつながつてゐるんでゲスから……へエ。

……というのはこのチイチイって奴が大変なものなんでです。

あとから聞いた話では支那人と伊太利人イタリの混血娘あいのこだったそうです

が、とても素晴らしい別嬪でげたよソレア。おまけにテエブルの六ツは愚か二十でも三十でも持つて来て下さい。一人で捌さばいて見せるからナンテ大それた熱を吹きやがって、来る早々から仲間に憎まれておりましたがね。生やさしい女じゃ御座んせんでしたよ。

そうですねえ。年はあれでも二十三ぐらいでしたらうか、スツカリ若返りにしておりましたので一寸見ちよつとみはちやんファイ嬢ちやんよりも可愛いくれえで、ファイ嬢ちやんとお揃あいの前髪を垂らして両方の耳たほツ朶たほに大きな真珠をブラ下げた娘やつが、翡翠色ひすいの緞子どんすの服の間から、支ちゃんち那ヤン一流の焦こげ付くような真紅の下着の裾をビラ付かせながらジロリと使う色眼の凄かったこと……流石さすがのあつしも一ぺんにダア

となつちやつたんで……流石のだけ余計かも知れませんが、誰だつてアイツにぶつかったらタツタ一目のアタリ一発でげしよう。ハタからファイ嬢ちやんがオロオロ気を揉んでいるようでしたが、そうになるとモウ問題じゃ御座んせん。

その場でインキを二つ三つぶっ付け合うと……へエ……ウインクですか……どうも相すみません。亜米利加じやインキの方が通りがいいんで……ツイうっかり、そのインキの方にきめちやつたんで……そいつに気が付くとファイ嬢ちやんが慌テールてて卓子テールの向うからあつしに手を振って見せましたが、そうなつたら夢中でゲスから気にも止めません。ただその時にファイ嬢ちやんを振り返って睨み付けたチイ嬢ちやんの眼付の怖しかった事ばかりは今でも骨身にコタえて記憶おぼ

えております。その睨みにぶつかつたファイ嬢ちゃんが、真青になつてフラフラとブツ倒おれそうになつたんですからね。あつしもズツト後あとになつて、そのチイ嬢ちゃんの睨みの恐ろしい意味がわかつてスツカリ震え上がつちやつたもんですがね。

その晩のことです。あつしは台湾館の地下室で一緒に寝ているノスタレ爺に感づかれないようにソーツと起き出して、首尾よく台湾館を抜け出しちやいました。それから約束通り噴水の横でチイ嬢ちゃんに会つて、演芸館の裏で夜間出勤のサンドウイチマンを二人買収して、チイ嬢ちゃんと二人で薄い布張りの四角い箱の中に這入つて、入口の看守にテケツだけ見せて会場を抜け出しました。アトから考かんげえるとあつしやこの時にいい二本棒に見立てられていたんです

なあ。節劇ふしげきの文句じや御座んせんが「殺つゆされるとは露知らず」でゲス。屠所としよの羊どころじやねえ。大喜びで腸ソーセージ詰つになりに行つたんですからね。

博覧会の会場を出るともう、カイモク西だか東だかわからねえセントルイス聖路易の町つづきでさあ。イルミネーションの海の底を続きつながら流れて行く馬車と電車の洪水でサ。その頃はまだ亜米利加にも円タクなんてものが無かつたんですからね。

あつしの先に立つたチイ嬢ちやんは、一町ばかり行つた処の薄暗い町角に在るポストの下で立停たちどまりましたから、あつしもその横で立停まつて巻煙草に火を点つけました。すると間もなく白い馬を二頭附けた立派な馬車が来て、ポストの前に止まりましたが、それを

見るとチイ嬢ちやんはイキナリサンドイチ 広 告の服を脱いで地面じべたに放り出して、その馬車に飛乗って手招きするんです。ですからあつしも慌おろてて女の真似をして馬車に飛乗るトタンに、前後左右のスクリンおろを卸したチイ嬢ちやんがあつしの首ツ玉にカジリ付いてチュウツ……へへへ……どうも相すみません。ここがヤツパリその本筋なんで……このチュツてえ奴が腸詰ソーセージの材料タネに合格アニリンの紫スタムプみてえなチユーくちだつたんで……實際眼が眩くらんじまいましたよマツタク。いいにおい芳香はらわたが臟腑はらわたのドン底まで泌しみ渡りましたよ。そうなるにおいと香水においだか肌の香においだか解かれあしません。おまけにハッキリした日本語で、「まあ……よく来てくれたねえ、アンタ」と来たもんです。

トタンに前後の考えなんか、笠の台と一緒にどつかへふツ飛んじやいましたね、キチガイがしょうちゆう焼酎を飲んで火事見舞に来たよ
うなアンバイなんで……暫くして女がスクリンを上げてから気が付いてみると、その馬車の走り方のスゴイのにチョット驚きましたよ。
ほかの馬車をグングン抜いて行くので、金ピカ服の交通巡查が何度も何度も向うから近付いて来て手を揚げて制止とめにかかったようでしたが、私あつし等の馬車に乗っている黒い頬ほおひげ鬚はやを生したシルクハット
絹帽むちの馭者がチョット鞭を揚げて合図みたいな真似をすると、どの巡查もどの巡查も直ぐにクルリと向うを向いて行つちまつたんです。

それが右へ曲つても左に曲つても、どこまで行つてもどこまで

行つてもそんなんですから、あつしはだんだん不思議になつて来ましたが、アトから聞いてみると無理もない話です。その馭者と
というのが旦那様……セントルイス聖路易切つてのギヤングの大親分で、カン
ト・デツクてえ凄^{こぶん}い奴だつたそうです。セントルイス聖路易の町中の巡査は
ミンナこのデツクの乾分みてえなものだつたつてえんですから豪
勢なもんで……しかも一緒に乗っている支那娘のチイ嬢と、もう
一人のフイ嬢ちゃんとは揃いも揃つてこのカント・デツクの妾めかけだつて事
がそんな時のあつしにわかつたら、そのまんま目を眩まわしちやつた
かも知れませんね。地球が丸いどころの騒ぎじや御座んせんから
ね。

それだけでなくとも何だか少々、薄ツ気味が悪くなりかけていると

ころへ馬車が止つて、一軒の立派な明るい店の前に着きました。

チイ嬢ちやんはそこであつしのキタネエ首根ツ子に今一つキツスをしま

すと、あつしの手を引きながらその店の中に這入つて行きました

が、それは大きなレコード屋だつたんですね。スバラシイ花輪や

流行はやり児の歌い手らしい男や女の写真が、四方の壁一パイに並ん

でいる店の広間へ、縦横十文字に並んだ長椅子よに凭りかかつた毛

唐めとうと女唐とが、フロツク張りの番頭や手代の鳴らすレコードを知

らん顔をして聞いていたようです。

その横ツチヨの木煉瓦張りの通とおり路みちをやはり女に手を引かれ

ながら通り抜けて、奥の行当りのドアを抜けるとヤット肩幅ぐら

いの狭い廊下に出ました。その廊下は向う下りになつていて、黒

いマットが一面に敷いて在るために足音も何もしないまま地下室へ降りて行くようになっていたらしいんですが、その中うちに右に曲つたり左に折れたりして扉ドアを三つか四つぐらい潜つて、もうだいぶ下へ降りたナ……と思つたトタンに廊下の天井に点ついていた電燈が突だしぬけ然に消えちやつて真暗闇まっくらやみになつちました。それがチイ嬢ちゃんの顔の見納めだつたんで……今度目、見た時は夕刊の新聞で手錠をかけられた笑い顔で、その次に見たのはデックと並んで死刑の宣告を受けている写真ニュースの横顔でしたかね。

もちろんソン時のあつしにやそんな事がわかりつこありやせん。神様だつて知らなかつたんですから……それと一いっしょ所に女も手を放しちやつたんですから、あつしはタツタ一人真暗闇の中に取残

されちやつたんで……往生しましたよ。まつたく。

それでもまだ自惚うぬぼれが残っていたんですから感心なもんでげしよう。さては女がイタズラをしやがったんだナ……ヨオシ……その気ならこつちでも探り出して見せるぞ……てんで鬼ゴツコみたいに手探りで向うの方へ行きますと、いつの間にか廊下の行当りの扉ドアを通り抜けて一つの立派な部屋に出ていたんですね。不意討ちにパツとアカリが点ついたのを見ると、太陽が二十も三十も一時に出て来たようで今度こそホントウに腰を抜かすところでしたよ。何しろそこいら中反射鏡ダラケの部屋に、天井一パイの花電燈が点ついたんですからね。

世の中には立派な部屋が在れば在るもんだと思いましたがねえ。

この節なら銀座へ行けあアレ位の部屋がザラに在るんですから格別驚かなかったかも知れませんがね。何の事はない、竜宮みてえな金ピカずくめの戸棚や、椅子、テーブル、花束や花輪で埋まった部屋なんで、ムンムンする香水の匂いで息が詰りそうな中にタツタ一人突立っている見窄みすぼらしいあつしの姿が、向うの壁一パイに箆め込んで在る大鏡に映つたのを見た時にや、思わずポケットへ手を当てましたよ。コンナ立派な部屋でチイ嬢ちやんを抱いて寝た日にや、イクラ取られるかわからないと思ひましてね。そこまで来てもまだ瘡毒かさげ気が残っていたんですから大したもんでゲス。

「アハハハ。お金のこと心配してはイケマセン……ミスタ・ハルキチ……アハハハ……」

だしぬけに大きな笑い声がしたのでビックリして振向きますと、あつしの背後うしろの大きな蘭の葉陰から四十年輩の夜会服の紳士が、歩み出して来ました。その柔らかな笑顔を見ると、たしかにどこかで会ったことの在る顔だとは思いましたが、どうしても思い出せません。真逆まさかにツイ今サツキ乗って来た馬車の馭者が黒い頬髯を取ったものだとは気付きませんでしたので、多分台湾館に居る時にチツプを余計に呉れたお客の一人じゃないかと思いつながらホツとタメ息しておりますと、その紳士は右手を差出して、あつしと心安そうに握手しながら一層、眼を細くして申しました。しかも、それが片言まじりの日本語なんです。

「……アナタ……この家うちがドンナ家うちですか、よく御存知でしょう。

それですからメンド臭いお話やめましようね。用事だけお話ししましょうねえ。コチラへお出で下さい」

と私を手招きしながら部屋の隅の巨大な銀色の花瓶の処へ来ま

した。それは人間ぐらいの大きさの花瓶に蝦夷菊の花を山盛りに

挿したもので、四五人がかりでもドウかと思われるのをその紳士

は何の雑作もなく一人で抱え除けますと、その花瓶の向うの寄木

細工の板壁の隅に小さな虫喰いみたいな穴が二つ三つ出来ており

ます。その穴の一つに紳士が、時計の鎖に附いている鍵を突込み

ますとパタリと音がして二尺に二尺五寸ぐらいの壁板が開いて、

奥の浅い十段ばかりに仕切った棚があらわれました。それがその

毛唐の紳士が片言まじりの日本語と手真似で話すのを聞いてみる

とこうなんです。

——この秘密の棚を錠前を使わないで開けられるようにしてもらいたい。材料と道具は入用なだけ直ぐに取寄せてやる。お前は台湾館の横で売っている不思議な箱根細工のマジック箱を作った大工さんだろう。だからアノ箱根細工の通りにここへ秘密のカラクリを取付けてもらいたいのだ。そうしてその開き方を自分にだけ教えて、直ぐに日本へ帰ってもらいたいのだ。お金はイクラでも遣る——

と云うのです。毛唐人の大工なんてものは無器用でゲスからあの箱根細工のような細かい仕事がお手本を見せられても真似られないらしいですね。

しかしあつしはこの時に虫が知らしたんでげしよう、何となく……これあイヤナ処へ来たナ……と思ひましたよ。ちいつと虫の知らせ方が遅う御座んしたかね。とにかく……

「これあ何に使う柵だい。その目的がわからなくちや作る事あ出来ねえ」

て云つてやりますとね。その毛唐がホンノちよつとの間までしたつけが青い眼を剥むき出して恐しい顔になりましたよ。けれども直ぐに又モトの通りの柔和な顔に返つて、前の通りの愛嬌のいい片言まじりの日本語で手真似を初めました。

「これは宝石の袋を仕舞しまつとく柵だ。私は昔からの宝石道楽で世界中の宝石を集めるのが楽しみなんだから、万一泥棒が這入つて

も心配のないようにコンナ仕事を頼むんだ。千弗ドルでも一万弗ドルでも欲しいだけお金を上げる。あの娘も付けてやっていいから是非どうか一つ請合つて下さい」

てんで見かけに似合わずペコペコ頭を下げた頼むんです。

「私は亜米利加中に別荘を持っているのだから万一ここで貴方あなたの仕事が気に入ったら、まだ方々で、お頼みしたいのだ。貴方に一生喰えるだけの賃金を上げる事が出来るのだ」

と顔を真赤にして揉み手をししいしいペコペコお辞儀をするんです。カント・デスクは前からチャンと研究して、あつしを口説くどき落す手を考かんえていたらしいんですね。仕事の出来る日本人なら金を呉れて頭を下げさえすればあ कोरोリと手に乗って来るものと思つ

ていたらしいんですが、コイツが生憎あいにくなことに見当違いだったのです。イクラ「わんかぶ、てんせんす」だつて時と場合によりけりです。支那人チャンチャンと違つて日本人には虫の居どころつて奴がありますからね。

あつしはデツクの話うちを聞いている中に、ピインと来ちやいました。さてはあのチイ嬢ちゃんの色目は喰わせものだったのか、この毛唐人が俺をここまで引っぱり込むためにおとり罠おとりに使つてやがったのか、この野郎、俺をいい二本棒に見立てやがったんだな、俺を女で釣つて泥棒仕事のカラクリ細工に使おうとしやがったんだナ。して見るとコイツア飛んでもない処へマグレ込んで来ちやつたぞ。しかもここまで深入りしたからにやトテも生きて日本にや帰けえれめえ……

と気が付くと腰を抜かすドコロかあべこべに気持がシャンとなつちまいました。

……妙な性分であつしは気が長い時にヤヤタラに長いんですが、何かの拍子にカーツとしちまうと、それから先がめくらめつぼう盲滅法ほうに手ツ取り早いんで……べらぼう篋棒べらぼうめえ日本人じゃねえか。金やピストルに眼が眩くらんで毛唐まいたうの追剥おいはぎや泥棒の手伝いてんないが出来るかかってんだ。

「ふおるもさ、ううろんち」を知らねえかってんで、イキナリその毛唐まいたうに組付いて大腰おほこしをかけようとしたもんです。これでも柔道二段の腕前うでまへですからね。

へエ。それあ見上げたもんでしたよ。そこんところだけがね。アトがカラツキシ意気いげ地ぢが無なえんで……。

今から考^{かんげ}えてみるとあん時によく殺されなかつたもんで……多分、出来ることならあつしを威^{おど}かし上げて柔順^{おとな}しくして、彼の棚の扉の細工をさせようつてえ腹だったのでしょう。……コイツは日本一の細工人に違いない。コイツを取逃^{とりに}がしたら二度と再びコナ細工は出来っこねえ……ぐれえに考^{かんげ}えていたのかも知れませんがアブネエもんでゲス。今から考^{かんげ}えるとゾツとしますよ。

組み付いたと思つた時にヤカント・デツクに両腕をシツカリと掴まれておりました。しかもその指の力の強さつたらありません。あつしの腕の骨が粉^{こな}々になつて行くような気持ちで、身体中^{からだ}が痺^{しび}れ上つちやいました。トテモ敵^{かた}わないと思わせられましたね。手錠^{ひきちぎ}を引千切つて逃げたつていう亜米利加でも指折りのカント・

デスクですから、柔道二段ぐれえじや齒が立ちませんや。

デスク野郎はあつしの腕を掴んだまま顔の筋一つ動かさねえでニコニコしながら吐ぬかしました。

「アナタ。憤おこるといけません。あたしカント・デスクです。ゆつくりして下さい。面白いものを見せますから……」

と云ううちにあつしを廻転椅子みたいにクルリと向うむきにして軽々と抱え上げて、横のドアから出て行きました。

「いけねえいけねえ。俺おれあ明日あしたつから又、台湾館の前に突立つて怒鳴らなくちやならねえ約束がして在るんだ。放してくれ放してくれ」

と大暴れに暴れたもんですが何の足しにもなりません。そのま

んまその次の部屋だったか、その次の部屋だったか忘れましたが、小さな粗末な部屋へ抱え込まれますと、そのコンクリートの荒壁に取付けられている一枚硝子の小窓から向うの部屋を覗かせられました。ちょうど赤ちゃんがおシッコをさせられるようなアンバイ式にね……。

あつしは暴れるのをやめてボンヤリと見惚れてしまいましたよ。向うの部屋の状態がアンマリ非道いんで、呆れ返ってしまったんです。

へエ。それがドウモここではお話出来難いんで……お二方お揃いの前ではねえ。へへへへ……。

何の事あねえ。水溜りに湧いたお玉杓子でゲス。それがみんな

な丸裸まるはだか体の人間ばかりなんですから開いた口あが閉ふがりません
 や。相当に広い部屋でしたがね。大きな椰子やしや、檳榔かんらんや、ゴム
 の樹の植木鉢おきなみの間に、長椅子だのマットだの、クツションだの毛
 皮おおなみだのが大浪おおなみのように重なり合っている間を、甘ったるい恰好
 の裸はだかむし虫連中むしが上になり下になりウジャウジャとのたくりまわ
 っているんですからトテモ人間たあ思えませんが。金魚鉢どじょうに鱒どじょうを
 ブチ撒まけたぐらいの騒さわぎじゃ御座ごせんせん。

不思議なものでね。そんなのを見せ付けられていながらエロ気
 分かんげなんてコレンバカリも起りませんでしたよ。今考かんえてもあの時
 の気持めいどばっかりはわかりませんがね。多分、冥途めいどの土産……てえ
 な気持めいどで見えていたんでしょう。何がなしに見つともなくて、馬鹿

馬鹿しくて、胸が悪くなるようで、横ツ腹の処がゾクゾクして無性に腹が立って来ましたが、そのあつしの耳へカント・デツクの野郎が口を寄せて吐ぬかしやがったもんです。

「あそこへ行きたいなら仕事をなさい」

あつしは又、あらん限りの死物狂いにアバレ初めました。部屋の中がムンムンと暑いので、汗みどろになつてしまいました。が、何しろ太刀山たちやまみたいな強ごうりき力に押えられているんでゲスから子供に捕まったバツタみてえなもんで……ウツカリすると手足が撈もげそうになるんです。

「そんなら今一つ面白いものを見せましょう」

と云うと今度はその小窓と反対側の低い扉ドアを開けて、そこに掛

かっている鉄の梯子はしご伝いに奇妙な眩まぶしい広い部屋へ降りて来ました。日本へ帰って来てから早稲田大学へ仕事をしに行った時にヤットわかりましたが、あれが水銀燈というものだったのですね。部屋のズット向うの隅のアーク燈みてえな眩まぶしい、妙な色の電燈が一つ点ついているキリなんです。その光りで見るとカント・デツクの顔色から自分の手の甲の色までも、まるきり死人のような鉛色に見えるんです。それでなくともあつしはサツキから死物狂いに暴れたアトで精も気魂も尽き果てておりましたので、カント・デツクの片手に吊下げられたまま死人のように手足をブラ下げながらそこいらを見まわしますと、それはどこかの工場こうばの地下室としか思えません。コンクリートの天井と、床の間が頭のつか間える

位低い、ダダツ広い部屋になつてゐるんで、ジメジメと濡れたタキの上には机も、椅子も塵ちりつ端は一本散らかつておりません。ただ向うの隅の水銀燈の下に、大きな大理石の白うすみたようなものがあつて、その中で天井から突出たモートル仕掛けの鉄の棒がガリガリガリガリと廻転しているだけなんです。つまり特別あつち誂えの大きな肉にくひき挽器械ですね。博覧会の中で見たことのあるソーセージ製造器械なんです。

しかしスツカリくたびれ切つて、物を考かんえる力も何もなくなつていたあつしにはソレが何の意味なんだかサツパリわかりませんでした。……ハテナ……蓄音機屋の地下室が、腸詰工場ちようづめになつてゐるのか知らん。コンクリの床の上をズルズルと引き摺ずられなが

ら、その白の処へ連れて行かれましたが、別に怖くも何ともありませんでした。

けどもカント・デックに首ツ玉を押えられてその白の中を覗かせられた時には、思わずゾツとして手足を縮めちやいましたよ。

その白は、もちろん底抜けなんで、その底の抜けた穴の上にステキに大きな肉挽き器械のギザギザの渦巻きが、狼の歯みたいに銀色に光りながらグラグラと廻転しているのですから落っこつたら最後、何もかもおしまいできあ。頭から尻までゴチャゴチャになつてしまふんですからドンナに有難いお経を聞かされたつてじょうぶつ成い仏い出来つこありません。

「あなた。この中に這入ること好きですか……仕事しますかしま

せんか」

流石さすがのあつしも……流石でなくたってヘタバツちまいますよ。

イクラ元氣を出そう……好きじゃありません……と云おうと思っ

ても身体中からだがコンクリートみたいになってガタガタ震え出すんで

すから仕様がありません。お笑いになりますけどもその場へ行っ

て御覧なさい。ナカナカそう平気でいられるもんじや御座んせん。

自分が何を考かんえていたか、今でも記憶おぼえていない位なんで、多分

氣絶する一歩手前だったのでしょう。タツタ一つ眼に残っている

のはあの鉛色の水銀燈のイヤアな光りだけなんで……まったくあ

の陰氣臭い生なま冷めてえ光りばかりは骨身に泌みて怖ろしゆうが

したよ。ネオン・サインが極樂の光りなら水銀燈は地獄のアカリ

なんでしよう。生きた人間でも死人に見えるんですからね。今思
い出してもゾオツとしちまいますよ。

そこへカント・デツクが何か合図をしたのでしよう。ズツト背
後の方の薄暗い処の扉が開いて、青い菜ツ葉服を着た顔中髯だら
けの大男が一人トロツコをノロノロと押しながら出て来たんです。
その時まで気が付かなかつたんですが、その入口から肉挽器械
の前まで幅の狭い軌道が敷いて在ったんで……その菜ツ葉服の男
が押しているトロツコが、あつし等の眼の前まで来て停まります
と、そのトロツコの上に乗っているものの上に被せた白い布片を
カント・デツクが取除けました。そうして思わず「ワツ」と云つ
て逃げ出そうとするあつしをガツシリと抱きすくめてしまいまし

た。

それは若い女の丸裸体まるはだかの死体だったので。しかもその小さな下唇を前歯で噛み破ったらしく鼻の下から乳の間へかけてベツトリとコビリ付いている血が、水銀燈に照らされて妙に黝くろずんだ腮鬚あごひげみたいに見えるのです。おまけにその右の手の中に何かしら大切なものを握り込んでいるらしく、シツカリと握り固めている上から左の手を蔽おおいかぶせてピッタリと胸の上に押え付けている姿が、たまらなくイジラシイものに見えましたが、その黒い髪かみ毛みの前の方を切り下げている恰好がドウ見ても西洋人とは思えません。支那人か日本人に相違ちがないんで……。

そう思っている中うちに菜ツ葉服の大男が、カント・デツクに腮で

シヤクられると直ぐに一つうなずいて菜ツ葉服の袖口をマクリ上げて、あつしの太股ふとももくれえある毛ムクジヤラの腕を二本、突出しました。その熊みたいな手で何の雑作もなく女の手を解とかせて、シツカリ握そなえつつている右手を開かせますと、中から見覚えのある台湾館備付けの桃色の支那便箋を幾つにも折つたものが出て来ました。そのレターペーパーの折り目を拵とげたやつを受取つたカント・デツクは、あつしの鼻の先にブラ下げて見せながら、今一度ニコニコと笑いました。赤チャンをあやすような顔で、あつしの顔を覗き込みましたがね。

それは筆と墨で書いた立派な日本文でした。多分、台湾館の事務室に在つた藤村さんの硯すずりばこ箱ばこを使ったものでしょう。昔の百

人一首に書いて在るような立派な文字でしたがね。

「チイちゃんと一所に出かけてはいけません。チイちゃんは支那人です。亜米利加のギヤングの手先です。わたくしはチイちゃんと一緒にギヤングのメカケになった、かわいそうな日本の女です。あたしの事を日本の両親につたえて下さい。」

天草早浦はやうら生れ

ハル吉親方様

中田フジ子より」

その死骸がちゃんフイ嬢の死骸だとわかると、あつしは何かしら叫びながら飛び付こうとしたように思います。今までに無い力が出たので、あぶなくデスクを振り離すところでしたが、そのあつしの左の手首をガツシリと掴み止めたデスクは面と向って立ちながら

今一度ニヤニヤと笑つて見せました。

「わかりましたか。仕事しますか」

「何をツ」

とか何とか怒鳴つたように思います。だしぬけに思いがけない力が出たもんで、鉄の噛締器バイトみてえなデスクの手を振放して、火の玉のようになって相手に飛びかかろうとしましたが間に合いませんでした。背後うしろから菜ツ葉服の男に息の詰まるほどガツチリと抱きすくめられちやつたんです。そうして犬ころでも棄てるように軽々とデスクの夜会服の腕の中へ投渡なげわたされちやつたんです。

あつしを受取つたデスクは喰い付いたり引つ搔いたりするあつしの手と足を背後うしろから束たばにしてギューと掴み締めてしまいました。

それから何か英語で二言三言云つたと思うと毛ムクジヤラの菜ツ葉服が、トロツコの上の女の身体からだを抱き上げて、何の雑作もなく傍の肉挽器械の中へ投込みました。

……へエ。その時に肉挽き器械の中から聞えて来た恐ろしい声を、あつしは一生涯忘れないでしょう。ファイ嬢ちゃんはまだ生きてたんです。多分、日本人のあつしを救たすけるためにギヤング仲間を裏切つた廉かどで、デツクの配下てしたに拷問されて気絶していたものなんですよ。

あつしもそのまんま気絶していたようです。

「じやぱん、がばめん、ふおるもさ、ううろんち、わんかぶ、て

んせんす。かみんかみん」

てお呼び声はどこからか聞えるように思つてフイツと眼を開いてみるてえと、コンクリート作りの馬小舎ごやみてえに狭い藁束わらたばだらけの床の上へ投げ出されているのに気が付きました。

片隅トアの扉の前に置いて在る汚いバケツの中を這い寄つて覗いてみますと、ジャガ芋と肉のゴツタ煮の上にパンの塊かたまりと水と、牛乳の瓶が投込んで在ります。……つまり何ですね。まだあつしを殺す気じゃなかつたのでしよう。あわよくば仲間につっぱり込んで仕事をさせる気でいたのでしよう。

しかしあつしは助かつたのが嬉しくも悲しくも何ともありませんでした。今から考かんげえてみるとあの時はヨツポド頭が変テコにな

つていたんですね。やっぱり地球癩癩てんかんの続きだったかも知れませんがね。自分がどこに居るやら、どうなっているやらわからないまま、眼が醒めない前めえから続けていたらしいうわごと譫言を、そのまんま云いつづけておりました。

「じゃぱん、がばめん、ふおるもさ、ううろんち、わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」

と繰り返し繰り返し大きな声で云つてたようですが、口癖つてものは恐ろしいものですね。

ところがこの御祈祷の文句のお蔭で、無事にこうやって日本に帰ることが出来たんですから、人間の運てえものはドコまでも不思議なもので……へエ……。

博覧会の方では大騒ぎだったそうです。あつしと二人の女がダシヌケに行方不明になったてんで警察に頼んだり何かして騒いだそうですが、わかる気づかいはありませんや。気の毒なのは藤村さんで、あつしの代りに礼フロッキ服を着て台湾館の前に立たされて、代りが出来るまでノスタレ爺じいと一所に「わんかぶ、てんせんす」をやらされたもんだそうで、二三日やつてる中にお尻のポケツヘジャラジャラ銀貨が溜まったのはいいが、声がスツカリ嘎かれちゃって電話にかかれなくなっちゃったそうで……無理ありませんや。木遣りなんか唄ったこたあねえんですからね。おまけに怒鳴りながらも、ずいぶん気も揉もんだそうですからね。……多分あつ

しが二人の女を誘拐かどわかしたんだろうテンデ、あべこべに世話あした支那料理店しなりようりやから台湾館が損害を取られそうになつちやつたそう
で……大工の治はるこう公こうつて奴はソクナ大それた人間じゃねえテンデ
藤村さんが一生懸命、頑張つてくれたそうですかね。

そのうちに聖路セントルイス易の何とか云いましたつけが、目貫めぬきの通りに
在るホテルの七階の屋上に夜遅くなつてから幽霊が出る。そいつ
がドウヤラ新聞に出た台湾館の行方不明の客呼び男らしいという
噂がホテルのお客さんたちの間に立ち初めました。馬鹿馬鹿しい
おぼげばなし
怪談おぼげばなしですがね……治はるこう公こうがまだチャント生きてるのに幽ゆうて
的きが出る筈はないんですが、毛唐つて奴は元来おぼげばなしゾツコン怪談おぼげばなし
が好きなんだそうで……つまらねえものを怪談おぼげにしちまう癖おぼげが

あるんだそうですが、そんな噂がどこともなく散り拡がって行く中に運よくギャング連中の耳に這入らないまに、藤村さんの耳に這入ったもんです。

「貴女……お聞きになりましたか、あのホテルのお化けの話を：

……」

「イイエ。まだ聞きませんわ。聞かして頂戴」

「一週間ばかり前からの事です。真夜中の二時頃……電車の絶まる頃になるとあのホテルの屋上庭園のマン中に在る旗竿の処へフロツキコートを着た日本人の幽霊が出るとです。ホラ直ぐそこに若いスマートな男と、赤っ鼻の禿頭が立っているでしょう。

あの通りの姿で幽霊が出て来て、あの通りの事を云うんだそうで

す」

「アラ怖い……ホント……」

「ホントですとも……それがあの新聞に出た行方不明の……ホラ……ずっと前に来た時にあすこに立っていたでしょう。ミスタ・ハルコーっていうあの男の姿にソツクリなんだそうです」

「まあ……ホテルじゃ困っているでしょうねえ」

「ところがあべこべ反対ですよ。お蔭で屋上庭園に行く者は一人も居なくなつた代りに、その声を聞きに行く者であのホテルは一パイなんだそうです。警察ではまだ知らないようですが、あの日本人の行方不明事件はあのホテルと台湾館とが組んでやっている日本人一流の宣伝方法に違いないってミンナ云っておりますがね」

「シツ聞えるわよ。日本人に……」

「ナアニ。彼奴等^{あいつ}は英語がわかりやしません。暗記した事だけを繰り返している忠実な奴隷なんですから……」

こんな話を入口の近くの卓^{テーブル}でやっているのを小耳に挿んだ藤村さんが、指を折って数えてみると、ちようどあつしが行方不明になつてから八日目だつたそうです。

藤村さんは西洋通ですから直ぐにピインと来たんでしよう。直ぐにその晩ホテルへ泊つて、夜中の二時頃コツソリと屋上庭園へ来てみると世にも哀れっぽい微^{かす}かな微かなあつしの声で、

「じゃぱアーン。がばアーンめんとオー。ふおるもつさあアー。うう……ろん……ちいイイイ。わんかぷう……ウ。てんせえんす

う——ツ……」

てやっているんだそうです。そこで藤村さんは胸をドキドキさせながら抜き足、さし足その声の聞える方に近付いてみると、その声の主は屋上庭園のどこにも居ない。その向い側のメイ・フラワ・ビルデングの七階の片隅に在る真暗な小窓の中から聞えて来る事が、夜が更けて来るにつれてハッキリとわかつて来た……というんです。

しかし亜米利加通の藤村さんは決して慌てませんでした。何喰わぬ顔をして翌る朝、台湾館へ帰って来ると直ぐに華盛頓ワシントンの大使に頼んで、紐育ニューヨークのプレーグっていう腕っこきの警察官に頼んだものだそうです。

ちようどそのプレーグっていう警察官は一生懸命になってギヤングの巣を探していたところだったそうで、早速ニューヨーク紐育の警視庁へズキをまわして取つときの刑事や巡査を借りてセントルイス聖路易へ乗込んで、土地の警察へも知らさないようにメイ・フラワ・ビルの様子を探ると、出入りする奴はみんな変装した前科者ばかりなんで、イヨイヨそれと目星を付けて水も洩らさねえように手配りをきめた二十人ばかりのプレーグの配下てしたが、アツという間もないうちにメイ・フラワ・ビルの地下室から七階まで総マクリにしてしまいました。双方とも怪我けが我人や死人が出来たりして一時は戦争みたいな騒ぎだったのですが、あつしはチツトも知りませんでした。そこから抱え出されてセントルイス聖路易の市立病院の病床ベットに寝かされ

ても相も変わらず「わんかぶ、てんせんす」をやっていたそうです。
……ところで、まだ話があるんです。これからがホントに凄
いんですね。

あつしがあらん限りの注射と滋養物のお蔭で、やっとモトの頭
になつて退院させられた時はもうユーカリの葉が散つちやつた秋
の末で、博覧会なんかトツクの昔におしまいになつておりました。
退院すると直ぐに警察に呼び出されて、ほんの型ばかりの訊問を
通訳付きで受けますと、領事さんからの旅費を貰つて桑港シスコから日
本へ帰りましたが、その途中のことです。たしか出帆してから十
日目ぐらいのお天気の良い朝でしたがね。あんまり航ナベゲタ海が退屈

なもんですから、眼が醒めても起き上る気がしません。そのま
ま特別三等とくさんの寢床の中で足をツン伸ばしてアーツと一つ大きな欠
伸くびをしたもんですが、そのトタンに桑港シスコで知り合いの領事館の人
からお土産に貰った小さな紙包みのことを思い出しました。ハテ
何だったろうと思ひながら、寢床の下のバスケットの中からその
紙包を取り出して開けてみると、どうでげす。それが平べつたい
ソーセージの缶なんで……。

コイツは占めたと思つて飛び起きると、食堂から五十二仙セントの日
本ビールを一本買つて来て、ベツトの上にアグラを搔きながら、
缶の蓋を開けて、美味うまそうな腸詰ちようづめの横ツ腹をジャクナイフで薄く
切り初めたもんですが、その中うちに何やらナイフの刃はに擱からまるもの

があります。……ハテ……おかしいなと思ひながら、そのナイフの刃を暗い窓あかりに透かしてみるとソイツが黒い女の髪の毛なんで……あつしはドキンとしましたよ。それでもマサカと思ひながら今のソーセージの切口をよく見ると、薄桃色の肉の間に何だか白い三角型がたのものが挟まっていますようです。ハテナと思ひ思ひホジクリ出してみると、そいつがどうです。三分角ぶかくぐらいの薄桃色の紙片かみきれの端なんで……永いこと赤い肉の間に挟まってフヤケちやっているんですから色合いなんかアテになりませんし、紙の質だつて支那出来のレターペーパーだか何だか、わかつたもんじや御座んせんが、それでもその紙が、その黒い髪の毛と一つ所とこに這入っていたことだけは間違いねえんで……。

それでもマサカ……とは思いましたがドウモ変な心持ちになりましたよ。あつしに惚れていたファイ嬢ちゃんが、あつしの身代りにソーセージになって、ここまで跟ついて来たんじやねえか……ナンテ考かんげえておりますと、最早もはや、ビールの肴さかなどころじや御座んせん。こつちの頭がソーセージみたいにゴチャゴチャになつちました。世界の丸っこい道理がズンズンとわかつて来るように思いましたね……まったく……へエ……。

……へエ。どうも奥様……いろいろと御馳走様で……これで御免を蒙りやす。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集の」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

※底本の「腸詰《ソーセージ》に」を、「腸詰《ソーセージ》に」に改めました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

人間腸詰

夢の久作（夢野久作）

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>